



多様な立場からの情報発信が大切

佐々義子

ジャーナリストでない私がJASTJに入会して10年以上になる。理事の佐藤年緒さんに勧められて、まず科学ジャーナリスト塾の2期生になった。理事の引野さんの班で「農業新聞」作成に取り組み、文章の書き方、写真の撮り方などを学んだ。第一線で活躍するジャーナリストの話はとても新鮮だった。これをきっかけに入会、その後すぐに小出五郎さん（故人）が会長に就任したことを思い出す。昨年からは理事に加わり、今は塾の手伝いをしている。塾生には自分と同じように充実した経験をしてもらいたいと思っている。

私はNPO法人で「くらしとバイオテクノロジー」を切り口にサイエンスコミュニケーション活動持续开展、遺伝子組換え作物・食品などをめぐるリスクコミュニケーションに10年以上取り組んできた。そうした場でよく聞くことばに、「マスコミが小さいリスクをことさらに大げさな記事にして、一般市民の不安をあおっている」というものがある。

確かにニュースは、リスクを含む事柄を取り上げることが多い。これには、情報発信をする研究者や開発者にも問題があるのではないかと考え、私たちは筑波大学形質転換植物デザイン研究拠点との共同研究で「知っておきたいこと」というシリーズの冊子を作成した。遺伝子組み換え作物・食品、食品添加物、農薬に関して、科学的な成り立ち、規制、安全性審査、利用状況、世界の動向などを広く浅く整

理し、全体像を把握しやすいよう工夫したものだ。

これらの冊子を利用しながら、メディアを交えた意見交換会なども行う。また、食の安全情報ネットワーク（FSIN）では、科学的根拠に基づいていない、明らかに不適切だと思われる報道に対し、説明資料を携えて面談を申し込んだり、意見書を送ったりしている。

このようにメディアにモノ申す立場にしながら、JASTJのお世話になっているのは矛盾するような感じもする。しかし、例会に出席したり、スクープの手伝いをしたりしながら、ここにはそれぞれ信念をもって、いろいろなスタイルで情報発信をされている人がいることを知った。そして「メディアは…」と、一括りにとらえることの危うさに気づいた。ただ、同じことが「行政は…」「企業は…」「消費者は…」でもいえるわけで、黙っているだけでは理解されないし、「聴くこと」がいかに大切かも改めて感じる。

JASTJは20周年を迎えた。科学ジャーナリスト賞の認知度もあがり、賞の候補になるだけで励まされたライターも少なくない。予想よりも受講生が多かった第13期の科学ジャーナリスト塾は、工夫をこらした運営で欠席者が少なく結束も高まっていると聞く。21歳になろうとするJASTJで、塾生だったころの気持ちを思い出し、縁の下でお役に立ちながらいろいろなことを見聞きしていきたいと思う。

（JASTJ理事）

CONTENTS

巻頭言	1
特集 スクープアジア東京会合2014	2
アジア太平洋6カ国が参加／福島取材ツアー 開会前夜の大混乱／会計報告／参加して考えた	
ニュース	6
第13期科学ジャーナリスト塾開講／相次いだ計報 20周年記念出版	

例会報告（11月） どうする原発のゴミ	7
例会報告（12月） 合同例会「医療ビッグデータ」	8
会員だより オンカロを訪ねて	9
塾生に聞く	10
追悼記	12
オピニオン／WEB編集長から	14
事務局だより	16

アジア太平洋6カ国から参加者 大成功だった科学ジャーナリズムの底上げ

世界科学ジャーナリスト連盟（WFSJ）と日本科学技術ジャーナリスト会議（JASTJ）は9月8日から12日までの5日間、東京・六本木の政策研究大学院大学（GRIPS）を中心に「SjCOOP Asia Tokyo Meeting 2014」（スクープアジア東京会合2014）を開催した。インドネシアから11人、ベトナムから11人、タイから2人、フィリピン、カンボジア、オーストラリアからそれぞれ1人のジャーナリストを招き、アジアの科学ジャーナリズムの底上げをねらって、集中講義や討議、取材実習などを実施した。また日本語、英語、インドネシア語、ベトナム語の4カ国語の同時通訳システムを使ったため、インドネシアから1人、ベトナムから2人の同時通訳者も参加。カナダからはWFSJ幹部の2人が参加した。

熱心な質疑にタイムオーバーも

初めに有本建男GRIPS教授が「科学記者への期待」と題して基調講演したあと、2日間の座学に入った。目黒公郎東大教授の「地震予防、備え、地震」、阿部博史NHKディレクターの「震災ビッグデータ」、根井寿規GRIPS教授と澤田哲生東工大助教の「日本のエネルギー安全保障・原子力安全技術と原子力政策」、そして取材現場から大森真テレビユー福島（TUF）チーフプロデューサーと大森亜紀読売新聞記者、林勝彦JASTJ理事の「福島取材について」などの講演があり、議論が交わされた。

大混乱が心配された4カ国語同時通訳システムだが、思いのほか順調に進んだ。同時通訳者は事前に放射線に関する専門用語などよく勉強していた。質疑応答もきわめて活発で、次のスケジュールに差し障りがあるので、司会者が強引に質疑応答を打ち切る場面も度々あった。もともと質疑応答の時間は多めにとって



4カ国語の同時通訳で進んだ講演と熱心な質疑応答（撮影 瀧澤美奈子）



講演を終えた澤田助教を質問攻めにする参加者たち（撮影 瀧澤美奈子）

あったが、それでも全然足りなかった。このことは逆に、参加者が極めて熱心だった証でもあり、「東京会合は大成功」という一つの理由にもなった。

とくに阿部氏の震災ビッグデータでは、スマホやカーナビによる大量の位置データを使って東日本大震災直後の個々の人や車の動きを再現。参加者に強い印象を残すとともに、これからの科学ジャーナリズムの新しい方向性を感じさせ、とても好評だった。

やっととれた深夜の自由時間

GRIPSでの講義や討論の日程も、福島県の取材ツアーの日程（10、11日）も、かなり過密で、参加者たちの自由時間があまりなかった。せっかくの機会なので日本の伝統文化にも触れてもらいたい、と思い、私は日本料理を味わったり、神社仏閣を訪ねたり、福島の温泉に浸かったりする機会はないかと密かに目論んだが、ほとんど実現できなかった。唯一、「日本で買いたい物をしたい」という圧倒的な要請をうけて、深夜に六本木に皆を連れ出し「ドンキホーテ」に押し込んだ。24時間営業で食料品から衣類、電機製品まで何でもあるドンキホーテは大好評で、夕食後に2回もドンキホーテに行った参加者もいた。

のど風邪を引いた女性もいたがすぐに回復。事件、事故、病気などは一切なかった。小さな反省点こそたくさんあるが、「アジアの科学ジャーナリズムの底上げを図る」という当初の目標は、ほぼ満点の出来で達成できたのではないと思う。

最後に、昨年と今年のスクープアジア東京会合は資金助成をしてくれた笹川平和財団（SPF）と会場等を提供してくれたGRIPSの協力なしにはとうてい実現できなかった。改めて、この場を借りて心から感謝を申し上げます。（JASTJ事務局長 引野肇）

福島取材ツアー 収穫大きかった現場取材

2014年の取材ツアーは9月10日から二日間、福島第一原発事故の被災地を訪ねた。東京会合参加者に加えて日本のジャーナリストも同行、計52人が2台のバスに分乗した。14年会合のテーマの一つが「National Security of EnergyとNuclear policy」。原発事故によって福島の暮らしに起きた混乱と現状を見るため、南相馬市、福島市、三春町を回った。

地元の現状を伝える

放射線被ばくは人々に深刻な不安を与えていた。第一原発から北へ25キロの南相馬市市立総合病院では、市民の希望者を対象に体内に取り込んだ放射性物質量を「ホールボディ・カウンター」で測定している。14年夏からは乳幼児用の「ベビースキャン」も導入、現在は自然放射能と区別できる量の被ばくはないことを確認している。装置の指導に当たった早野龍五・東大教授、臨床担当の及川友好・副院長、坪倉正治医師らは、原発事故当時の困難な医療状況と、子どもの健康を心配する親子のケアに役立っている現状を伝えた。

引き続き、隣の相馬市中央病院内科診療科長の越智

小枝医師が、汚染地域からの避難生活を続ける高齢者らの心身の健康状態が悪化しており、放射線によるリスクと、避難生活のリスクを冷静に見定める必要があると、医療現場での苦悩を伝えた。

同病院での質疑は予定を1時間以上超え、バスは10日の午後7時過ぎに福島駅前のホテル到着。夜の食事会場は同駅近くのパブだったが、前日、東京会場で講師を務めた大森真・テレビユー福島（TUF）チーフプロデューサーがジャズバンドを率いて登場。ライブ演奏を聴かせるというサプライズもあった。

11日は、福島市内の日本原子力研究開発機構（JAEA）笹野分析所を見学。三枝純氏から、ゲルマニウム測定装置による環境放射線精密計測の話聞いた。記者たちは片手で持てる携帯型検査器を使って、実際に付近の空間線量を測定。除染が済んでいないJRの線路付近では、分析所周辺の約2倍、毎時0.36マイクロ・シーベルトの線量を確認できた。

午後は福島第一原発から45キロ離れた三春町へ。ここは全国で唯一、独自の観測、判断で住民にヨウ素剤配布を決めたところだ。被災当時の混乱と対応を深谷茂・前三春町副長が、子どもたちに携帯してもらう「放射線測定バッチ」を用い全国の禅寺などと連携して被爆線量測定を続ける「実生（みしょう）プロジェクト」について、小池武志・東北大准教授が話した。また、



南相馬病院で放射線被ばくによる子どもたちの健康影響の現状を聞く参加者たち



夜の食事会場では講師によるジャズのサプライズ演奏も



原発事故、放射線被害に人間としてどう向きあうべきかについて話す福聚寺の玄侑宗久住職



地元メディアの取材を受けるベトナム人記者



原発事故時に独自判断でヨウ素剤を配布した三春町では当時の混乱と対応などを聞いた

（撮影 左上と右下が瀧澤美奈子、それ以外は小出重幸）

人間として原発事故、放射線被害にどう向きあうべきか、同プロジェクトの推進役でもある、玄侑宗久・福聚寺住職が総括的なレクチャーを行った。

帰国後に各国で相次ぐ報道

2日間、駆け足のツアーであったが、参加者の収獲は大きかったようだ。福島取材は帰国後、バンコクポスト紙（タイ）、ベトナムニュース紙（ベトナム）、Tribun Pekanbaru紙（インドネシア）など、次々と記事化、番組化されていった。

今回の取材ツアーについて批判的な意見の多いインドネシアの女性記者は「どれほど巨大な被害なのか心配して来たが、放射線汚染は限定的で、リスクを極端に恐れると健康被害など逆のマイナス面もあることを学んだ」と話した。一方、原子力政策が進められてい



福島での取材内容を2ページにわたって掲載したタイのバンコクポスト紙

るベトナムからの女性記者は、「ベトナム政府は技術的に安全が保証できると話すが、日本の技術でも克服できない事故があるのだという貴重な現場を取材できた」と述べた。それぞれに、現場を踏むことの大切さを痛感したようだった。（JASTJ会長 小出重幸）

通訳めぐり開会前夜に大混乱

今回の会合の特徴のひとつは、複数の言語が飛び交った点である。母国語しか理解できない参加者のために用意された通訳は4人（日本語～英語、英語～ベトナム語、英語～インドネシア語、ベトナム語～インドネシア語）。日本語、英語、ベトナム語、インドネシア語のどの言語も同時通訳され、参加者は手元のレシーバーを聞きたいチャンネルに合わせて聞ける、というしかけである。

開会前日、セッティングをした業者の指導のもとで通訳用ブースに通訳が実際に入り、テストを行った。これがなかなか厄介だった。たとえば日本語での発言があった場合、いったん英語～日本語の通訳によって英語に翻訳され、それがさらにそれぞれの通訳によってインドネシア語、ベトナム語に翻訳されるという比較的シンプルな2段構え。

しかし、たとえばベトナム語で発言が行われた場合には、英語～ベトナム語の通訳がベトナム語を英語に翻訳し、それを日本語～英語の通訳によって日本語に

訳すと同時に、ベトナム語～インドネシア語の通訳がインドネシア語に翻訳する。その間、インドネシア語～英語の通訳はマイクの占有権を解放して待つ。

つまり、どの言語による発言かによって通訳経路が異なるためトリッキーで、一時は通訳の1人が「やってられない」とさじを投げるまでの大混乱に。夕方に始まったテストは数時間におよび、混乱なく通訳ができるようになったのは夜8時半ごろ。「これで行ける！」と全員が確信した瞬間、一同から安堵のため息が流れた。（JASTJ理事 瀧澤美奈子）

会計報告

スクープアジアは、世界科学ジャーナリスト連盟（WFSJ）がカナダ国際開発研究センター（IDRC）と笹川平和財団（SPF）から資金を得て実施している事業だ。2013年～15年の3年プロジェクトで、JASTJは日本における事業実施に全面的に協力している。

SPFが計画開始時に認めたのは、合計で3100万～3200万円の3年継続事業とするというものだった。1年目の予算は9万7,700ドルを上限として、また2年目は15万9,000ドルを上限として認められた。

1年目は11月に海外からリーダーやメンター（指導者）ら18人を招いて1週間の東京会合を実施、また韓国からは自費で5人が参加してくれ、有意義な意見交換ができた。1年目の決算は9万7,255ドルだった。2年目は9月にメンティー（被育成者）も含めて34人を招き、1週間の東京会合を実施した。これから報告書を作成するが、決算は14万4,880ドルとなる見込みだ。

JASTJ会員・非会員を問わずスタッフとして働いてくれた方たちには予算の範囲内で謝金をお支払いしている。ボランティアは無料ではなく有料で、というのを基本方針としているためだ。（JASTJ副会長 高橋真理子）



議論するアジアのジャーナリストたち。奥に見えるのが開会前夜に必死の調整をした4か国語同時通訳ブースだ（撮影 瀧澤美奈子）

スコープアジアに 参加して

〈海外参加者〉

多くを学べた東京会合

ダイナ（インドネシア）

日本を訪れ、科学ジャーナリズムについてさらに学んだことは、私にとってとても素晴らしい経験となりました。東京会合は本当にとってもよく準備されていました。参加者がトレーニングをもっともうまく受けられるように、JASTJや笹川平和財団の方々がベストを尽くしてくれました。災害マネジメントについて日本の最高の科学者たちから知識を伝えてもらったことも素晴らしかったです。

福島までの旅は長かったけれど、訪れる価値がありました。半径30キロメートル以内のいくつかの場所は“ゴーストタウン”であっても住民がいました。人々が安全を確認できるように、行政が道路の脇に線量計を設置していると知ったことは興味深いです。私はこの行事から多くを学びました。JASTJおよび笹川平和財団の皆様は心から御礼申し上げます。

目を開かせてくれた旅

ブルース・アヴァサダノンド（タイ）

日本滞在中のすべてのことについて、とてもよく準備されていたことが非常に印象深かったです。細かな点がすべて配慮され、私たちの訪問をととてもスムーズにしてくれました。私はまた、大変多くのことを発表者や訪問地から学びました。このプログラムに参加する前、私は福島の食べ物や放射線にとっても慎重でした。しかし、科学者や医師たちから直にこの問題について学んだことによって、このエリアでとれた食べ物を消費することが、私たちの健康に害を及ぼさないことを確信しました。

実際、このことはカンボジアからきたキムホンと最終日に書いた記事のトピックにもなりました。加えて、私たちのチームはオーストラリア人のメンターであるニッキー・フィリップスから素晴らしいサポートを受けました。今回の旅は、科学がいかに私たちの生活にとって重要か、そしてジャーナリストがいかにありがちな誤解に対処し、人々の不安を和らげることに貢献できるかということに、私の目を開かせてくれるものでした。



〈国内参加者〉

海外に発信できたことに喜び

震災・原発災禍の福島に住む者として、またたまたま報道という立場にある者として、常日頃いちばん感じていることが「福島のありのままの姿が県外に伝わっていない」ということです。そうした中で県外どころか海外の、それも情報を発信する報道記者の皆さんの前で話ができ、福島に来てもらえたことは、大変にうれしく、貴重な機会でした。

余談ですが、福島の夕食会での演奏は、個人的に今年でいちばんいいものでした。皆さんに来ていただけたことがよほど嬉しかったのだと思います。音楽は「心映え」がそのまま出るものですから。（テレビユー福島チーフプロデューサー 大森真）

アジアの記者に勇気もらう

東日本大震災から3年半が過ぎたが、日本の「いま」が海外にどう伝わっているかがよくわからない。だから、今回アジアの意欲的なジャーナリストたちと意見交換でき、彼らが福島を訪れて記事を書いてくれたことがうれしかった。

生活部の記者として、放射能関連の記事をどう伝えるかは今も悩んでいる。「食べるか、食べないか」「避難するかしないか」、読者の「選択」に役立つよう、主張の押しつけにならない記事を心がけて書いてきたつもりだ。参加者からは「放射能に対する考え方が家族内で違った場合は？」「食べても安全と思っている人が多いの？」と、現地の暮らしぶりを尋ねる質問が多かった。暮らしの視点から記事を書く大切さに改めて気づかされ、こちらが勇気をもったように思う。（読売新聞記者 大森 亜紀）

反省点残ったプログラム

21世紀の歴史に残る「原発3連続爆発・メルトスルー」放射能大惨事の真実に迫れたのか？ 今回の講師陣と福島訪問先では、はなはだ不十分だったと思う。その理由は、原子力推進派の講話が多く批判派が極めて少なかった点、12万人の故郷喪失者、1000人ほどの原発関連死、離婚とPTSDの増加、コミュニティ崩壊、酪農や養鶏の仕事を奪われた最困窮者の声を聞いていない点だ。5mSvで小児白血病率に有意差、行き場なき核廃棄物、制御不能の汚染水、廃炉問題、200人を超すトモダチ作戦の米国人訴訟などもある。

これが足掛け3年、100人の心の叫びを聴き、映画2本を制作した監督としての本音だ。「JASTJは原発推進団体」との批判を耳にすることもあるだけに、理事の一人としてよりバランスの取れた運営に努めるべきであったと反省している。（JASTJ理事 林勝彦）

塾生25人で第13期塾スタート

第13期の科学ジャーナリスト塾が10月7日から半日間、東京・内幸町の日本プレスセンタービル8階の会議室を会場に月2回のペースで始まった。会員による周知やホームページを通じて25人の塾生が集まった。このうち20人が文章の指導を受ける全日程コースを選択。大学生や研究者、政府系機関・民間企業の情報発信者、フリーランスのライターなど、立場や年齢はさまざまだが、いずれも意欲溢れる面々で、前期に引き続いて3人も継続参加してくれた。(塾生の参加動機を10-11ページで紹介)



「医療現場でのコミュニケーション」をテーマに塾生と議論する西野副塾長
(撮影 佐藤年緒)

旧塾生が運営に大活躍

運営はボランティア精神に徹し、会員からサポーターや文章指導アドバイザーを募ってスタートした。開講日は、塾生の自己紹介に続き、出席したサポーターからも応援のあいさつが続いた。

「こころざしと技を学ぶ」最初のテーマでは、1月に亡くなった小出五郎さんが遺した映像作品「足尾銅山の光と影」を鑑賞。この作品を観て提出した塾生の文を武部俊一さんが15人分(締切日までの提出分)を添削した結果を皆に示したほか、高木勲生・会報編集長とともに文を書くうえでのポイントを指導した。

塾生の動機や問題意識を生かすうえで、塾のOB・OGによる協力が大きい。かつて塾生だった西野博喜さん(副塾長、歯科医師)や藤田貢崇さん(JASTJ事務局長補佐)は、今回、Webで塾生に資料や情報を共有するための環境を整えた。塾での話題提供も担う。西野さんの「医療現場でのコミュニケーション」の話題に塾生間のグループ論議が盛り上がった。第12期の塾生も「失敗を語る」から何を学んだか、12月16日に発表。こうした若い世代、塾生の意欲が主導する塾の展開に期待している。

(JASTJ理事 佐藤年緒)

浅井さん、北澤さん 相次ぎ逝去 JASTJに大きく貢献

JASTJの活動に大きく貢献した2人が2014年9月に相次いで亡くなった。1994年のJASTJ設立時に発起人の1人として会の運営、特に財務面で力を尽くした浅井恒雄・元理事(元日本経済新聞編集委員)と、科学ジャーナリスト賞の審査委員や月例会の講師を務めた北澤宏一さん(元科学技術振興機構理事長)だ。(追悼記を12-13

ページに掲載)

浅井さんは9月22日に肺炎のため79歳で死去。29日に横浜の野毛山キリストの教会で葬儀が催され、JASTJ関係者も参加した。

20年前の大動脈瘤手術をはじめ、胆のう炎や心臓バイパスなど数回にわたる大手術を受けたが、その都度、驚異的に回復。しかし14年4月に大腸穿孔で緊急手術、9月2日から自宅療養を続けていたが肺炎で再入院、1週間後に亡くなった。

日経新聞の記者時代は科学技術部に取材、編集委員としても活躍した。特に海洋開発や繊維、化学分野で大学や産業界に幅広い人脈を持っていた。若いころにキリスト教の洗礼を受け、仕事場ではあまり見せなかったものの教会活動にも熱心に取り組むキリスト者だった。

北澤さんは9月26日、入院先の東大病院で死去。71歳だった。東京都市大学・科学技術振興機構(JST)が11月17日に催した「お別れ会」には、多くの人々が参列。会場に飾られた「夢」と書かれた色紙が目をつけた。

東京大学の教授時代にはいち早く高温超伝導の追試に成功、世界的な高温超伝導フィーバーの火付け役となった。その後、JSTの理事長に就任。退任後は福島原発事故独立検証委員会(民間事故調)委員長を務め、さらに都市大学長に就いて若者の教育に情熱を傾けた。JASTJのよき理解者であり、7月の20周年記念の夕べには邦子夫人と出席、音楽を楽しんだばかりだった。

(JASTJ理事 佐藤年緒、高木勲生)

20周年記念出版物発行へ

JASTJの設立20周年を記念して発行する出版物の制作も、最終段階を迎えた。多忙な方々に執筆を依頼したこともあり、当初の予定からは遅れたが、2014年中には印刷所に送付、次号会報が会員の手元に届く前には発行される予定だ。この書籍には、経験ある科学ジャーナリストを中心とする執筆者が「自らが経験した具体例を示し、そこから得た反省や教訓」を伝えてこれからの世代が過ちを繰り返すことのないよう願うメッセージを込められている。

前号の会報に掲載した「STAP細胞ねつ造疑惑・iPS細胞誤報問題」の座談会をはじめ、「原子力で繰り返された水俣病の失敗」「戦術的失敗の省察—もう一步踏み込み、本質に迫れ」「事故原因報道は科学記者の仕事」「東海地震の予知をめぐる混迷をどう克服するか」「伝えられなかった長崎豪雨災害の教訓」など幅広い話題を提供、執筆者自身の貴重な経験をもとにしたメッセージが込められた原稿に仕上がっている。

2014年1月に逝去された小出五郎氏による塾での講義「核の冬はソ連の謀略? ~放送への外圧と自己規制~」を、記録された音声から原稿化したものも収録する。また、若い人からのメッセージとして、科学を伝える現場での苦悩や地道な努力が示された原稿も掲載する。

(JASTJ理事・藤田貢崇)

どうする原発のごみ 東京工業大学名誉教授 今田高俊氏に聞く

高レベル放射性廃棄物（原発のごみ）の処分について議論してきた日本学術会議の2つの分科会が9月に報告書を発表した。11月5日の例会では、分科会報告の基盤となった2012年9月の学術会議報告をとりまとめ、その後のフォローアップ検討委員会では委員長を務める東京工業大学名誉教授の今田高俊さんに、放射性廃棄物処分をどう考えればいいのか、話を聞いた。

途方もない10万年間の保管

原発が抱える大きな問題は、使用済み核燃料をはじめ放射性物質を含む原発のごみが大量に出ること。そして、その放射能を無害化する技術をいまだに我々人類が持っていないことだ。

「10万年もの間、安全に保管しなければならない高レベル放射性廃棄物の処分は、世界的にも喫緊の課題だ」と、今田さんは切り出した。人類初の完全な核廃棄物の最終処理施設として建設が始まったのは、今のところ世界でもフィンランド・オルキオ島のオンカロ（かくされた場所）計画のみ。岩盤を520mも掘って、その中に貯蔵するという。10万年前と言えば、ネアンデルタール人の時代である。「そんな途方もなく長い時間の安全性を常に確保できるかは全くの未知数。ましてや地震の多い日本では困難極まりない」と今田さんは指摘する。

学術会議が2012年9月にまとめた報告では、国の計画である「地層処分」について、原子力委員会に「白紙に戻す覚悟で見直す必要がある」と指摘、「総量管理」「暫定保管」「社会的合意形成」を重視しながら「多段階の意思決定」が必要であると提言した。多くのメディアはエネルギー政策見直しのきっかけとして、この報告に注目した。

2013年5月には、高レベル放射性廃棄物問題への取組みを前進させるため、学術会議は「高レベル放射性廃棄物の処分に関するフォローアップ検討委員会」を設置。原発ごみの暫定保管に関する技術的検討や社会的合意形成による解決の道を探るのに必要な課題を提言として整理し、2014年9月に2つの報告書として発表した。



原発のごみ問題について話す今田高俊・東工大名誉教授（撮影 高木毅生）

30年のモラトリアムを

今田さんによると、報告書のひとつ「高レベル放射性廃棄物問題への社会的対処の前進のために」では、暫定保管施設の建設を中心に検討した。人間の世代30年間を一区切りとして廃棄物を暫定的に保管するモラトリアム期間を設け、その間に最終処分に関する国民的合意を形成。暫定保管施設の建設は原発で利益を得てきた電力会社が担うべきだなどとする提言を盛り込んだ。

プロセスでは、最終処分法について国民的な合意の形成に少なくとも10年から20年がかかるという今田さんはみる。対策・条件があいまいなまま原発再稼働や原発新設が進むことに対しては、「現在世代の責任の原則」に反するとして、「無責任であり、容認できるものではない」と強調、将来世代に対し責任ある行動を取るべきだと指摘した。そのうえで、「再稼働が始まる可能性が高いなか、具体的な対策案を速やかに出す必要がある」と話した。

今回の報告書は、原発がもたらしたさまざまな問題を現在世代の責任として、我々一人ひとりが自分の問題として考え、真摯に向き合うことを求めている。今田さんの話を聞いて、負の遺産をどう公平に負担するのか、覚悟をもって意思表示することが、私たち現在世代に求められているのだと感じた。

最後の質疑では、将来世代を担う子ども達の放射線教育について、正しい理解と自ら判断する力を養う事の重要性が示唆されたことが印象的だった。

（JASTJ会員 安藤恵美子）



原発が残した「負の遺産」について質疑が交わされた会場の様子（撮影 高木毅生）

医学ジャーナリスト協会と合同フォーラム開催

医療ビッグデータ活用の「光と影」議論

JASTJは12月12日、東京・内幸町の日本プレスセンターで創立20周年を記念し日本医学ジャーナリスト協会（MEJA）と合同フォーラム「医療ビッグデータその可能性と課題」を開いた。情報通信技術の発達によって可能になった莫大な情報の医療活用について2講師が紹介、参加者は「光と影」を合わせた視点から活発な論議を交わした。

データを細分化、可視化の工夫

会場には約100人が参加、室山哲也氏（NHK）、浅井文和氏（朝日新聞）が進行役を務めた。最初の演者はNHKディレクターの阿部博史氏。東日本大震災時の人の避難行動を伝えた番組「震災ビッグデータ」に続いて制作した「医療ビッグデータ」を題材に、赤ちゃんの心拍情報を感染症治療に生かす米国の事例などを報告した。取得データは単なる1分間の脈拍数ではなく、1つの脈拍を毎秒256に分解して波形を捉えるもので、1人の赤ちゃんから得られるデータは1日当たり2000万を超える。さらに1000人もの赤ちゃんから得られたビッグデータを使うことで、平常時とは異なる波形から感染症の兆候を抽出できたという。

患者の呼び出しに看護師が病室に駆け付ける「ナースコール」の動きをデータ化した済生会熊本病院の取り組みも紹介。年間109万回に上るナースコールを1回ごとに何時何分、どの病棟のどの部屋に、なぜ呼ばれたかをデータに付随させた。

数値やグラフの解析だけでなく、時計の針の動きに合わせて出勤頻度が分かる「ナースクロック」と呼ぶ手法や、実際の看護師の動きのアニメーションを加えて可視化。看護師の過重な負担を避けた病室配置という医療リソースの改善につなげた。

医療の質を高める指標に

続いて京都大学大学院医学研究科の今中雄一教授が、高齢化の進行や財源が限られる時代に質の良い医療を確保するための取り組み「見えにくい病院内の医療の中身を測り、見える化する」について解説した。

医療の質を可視化・定量化するには、例えば急性心筋梗塞で病院搬送後に死亡した率や手術後の感染症発症など、さまざまなデータを用いた「診療パフォーマンス指標」を設定、さらに部門・職種を超えた協力・協働など、病院の「組織文化」まで指標化を試みている。この結果から病院間の質の差を公表することで、質の向上が期待でき、医療費の低減にもつながるという。

今中氏は「地域によって起こりうる医療崩壊の気配



医療ビッグデータ利用について講演を聴く参加者たち（撮影 西野博喜）

をいち早く察知してサポートができる。拠点病院など、さまざまな関係者が連携し、地域ごとの医療の質を向上してほしい」と訴えた。マスメデ



医療ビッグデータの可能性と課題について話す阿部氏（左）と今中教授（撮影 沼口麻子）

ィアにも「例えば死亡率ワーストテンなどとセンセーショナルに報道することでは医療の向上には結びつかない。地域を良くしていこうという思いで情報を発信してほしい」と要望した。

誰のためのビッグデータか？

全体討論では、医療情報をめぐる個人のプライバシー保護に関心が集まった。「悪意をもって行えばデータの流出は免れない。職業倫理的な制限をつけ、ルール作りが必要」と今中氏は指摘する。阿部氏は「データから個人を特定されないようにデータ処理などで様々な工夫をしている」と説明、「医療や命に関わるデータを扱う者としての覚悟、提供元の思いを知り、それを多くの人に伝え、知見を活用する覚悟が必要だ」と語った。

「ビッグデータは誰の利益になるのか」「読み解くのは誰か」といった根本的な問いのほか、データの信頼性、透明性の確保の課題も出された。海外では、データの提供内容を本人が承諾、対価を得るビジネスも始まっているという。遺伝情報を分析・解釈する専門家とデータを必要とする一般市民の間に立つ中間的存在が必要だとの意見も出た。

データをいかに正しく公平に伝えるのか、ジャーナリズムの役割も益々大きくなる。広い視点での活発な論議によって、参加者が身近な問題として考える機会になった。（第13期塾生・柏野裕美、熊谷善弘、櫻井護、鈴木美慧、田島直人、都丸亜希子、沼口麻子）

高レベル放射性廃棄物が眠る場所 オンカロを訪ねて

高レベル放射性廃棄物が10年以上にわたって、地中に静かに置かれる場所。そこがフィンランドのオンカロだ。世界最初の高レベル放射性廃棄物の処分は2020年から始まる。処分場が満杯になった後は永久に閉ざされ、誰も立ち入ることはできない。10月30日、筆者らが所属する大学のゼミで、オンカロを見学した。この時期の北欧は日も短く、もう真冬の服装が必要な寒さだった。

マイクロバスで地下440mへ

オンカロはフィンランド南西部のユーロヨキという沿岸部の自治体に建設されている。この地には3基の原子炉（1基は建設中）を持つ原子力発電所とビジターセンター（見学施設）がある。周辺には美しい自然が広がり、シカやハクチョウもすむ、北欧らしい風景を堪能できる場所。そんな地域の一角に、オンカロへの入り口がある。

当日は、午前中に放射性廃棄物処分事業を行うポシバ社による事業説明や質疑応答があり、午後からオンカロや作業中の低・中レベル放射性廃棄物処分場、建設中の原子力発電所内部を見学した。ただし、15人ほどの見学者にもかかわらず、オンカロの入構は安全上の理由から6名に制限された。

ビジターセンターからオンカロの入り口までは、バスで約10分。万一の事態に備え、緊急時の行動を説明したビデオを見る。ヘルメットや長靴、懐中電灯や携帯型酸素ボンベを装着して、マイクロバスに乗り込む。ふだんは閉じられたオンカロの入り口のシャッターが開き、蛍光灯で照らされたトンネル内をバスが進んでいく。花崗岩でできた地層に亀裂は少なく、むき出しのトンネルの壁面は全体的に乾燥しており、粉っぽい。ところどころにある亀裂からは水が滲み出ている。トンネルは10m進むと1m下る勾配で造られ、現在、深さ455mまで掘

られている。見学が許されているのは地下440mのところまでだ。

フィンランドでは使用済み核燃料を約5mの高さの铸铁製容器に入れてから銅製容器に格納し、1本ずつ鉛直に掘られた穴（処分孔）に埋めていく。地下440mの深さに処分孔が3個掘られていた。これらは試験的な掘削であり、実際の処分に使われるものではないという。1個の孔の壁面には亀裂を確認でき、水が滲み出ている。科学的な文献調査・地質調査でも見つけることができない亀裂があり、処分孔として掘削しても、このような場合には地下水の汚染を防ぐため、処分目的には使用できない。

実感をもてない廃棄物処分

オンカロは、過去12億年の間、安定した地層中に建設されているが、すべての場所を活用できるわけではない。日本に、本当に地層処分に適した地はあるのだろうか。

高レベル放射性廃棄物は少なくとも10万年間、静置される。このあまりにも長い期間を具体的にイメージすることはできない。オンカロを見学しても、その規模は日常とあまりにもかけ離れ、実感がわからない。このように実感をもてないことを、熱心に議論できるだろうか。

福島第一原発の事故後、日本では高レベル放射性物質の最終処分が話題になることが多いものの、フィンランドが国民への事業説明や意見交換を行ってきた期間に比べれば、遠く及ばない。フィンランドの原子力政策

は情報公開が徹底されており、国民からも一定の評価を得ている。一方、日本の情報公開は国民から信頼されているとは言えない。

日本での高レベル放射性廃棄物処分の国民的な議論は、まだ入り口にも到達していないように感じた。

（JASTJ会員 徳田剛、鳥山大）



オンカロ入口から440mを示す標識のある地下440mの地点に立つ徳田（右）と鳥山（撮影 藤田貢崇）

塾生に聞く 参加への動機と期待

10月7日から始まった第13期科学ジャーナリスト塾に参加した塾生は大学生、社会人と立場はさまざま。25人の塾生にこの塾で学ぼうと思った動機や塾への期待を語ってもらった。(関連記事を6ページに掲載)

日本語を見つめ直す

竹内麻美

古代から現代までの日本語を見つめ直し、現代科学の現状と課題を次世代にしっかり伝えたいと思います。今、私たちができることを精一杯行い、明るい未来のために、科学の進歩と普及に貢献したいです。これからの国際社会で、月と地球に植物を植え、また緑豊かな惑星になりますように。

今度は挫折せずに

柏野裕美

加齢黄斑変性という目の病気の飲み薬を開発する会社の広報に従事し、不可能を可能に変えるバイオテクノロジーの面白さに魅了されました。もっと科学に関わりたいと入塾。仕事の都合とはいえ12期は挫折、13期はそんな言い訳をしないよう頑張りたい。(PRコンサルタント)

科学を伝えるスキル

後藤明日香

大学で生物学を学び、大学院で原発事故におけるリスクコミュニケーションを研究しました。現在は雑誌などの仕事をし、理系教授へのインタビューでは膨大な専門知識を、簡潔にわかりやすく伝えることに苦勞します。科学を伝えるスキルを高め、科学と社会の関係性について皆様と議論を深めたい。

書く手法を学ぶ

都丸亜希子

専門家と非専門家をつなぎたい、との思いで12期を受講。昨年度の軸足は志、13期は手法かな。どれだけ身につけられるか、はなはだ不安に思うけれど、「習うより慣れろ」と居直っています。どちらも相当不足しているので受講しました。(国立医薬品衛生研究所)

遺伝情報をどう伝えるか

鈴木美慧

遺伝カウンセリングという科学と医療とコミュニケーションを学んでいます。科学技術によって読み解かれたゲノム情報は、個人の体質や病気のなりやすさに関係します。これらの情報を、どのように伝えれば必要としている人に届くのか、その方法とスキルを身につけたい。

(お茶の水女子大学大学院)

サメは好き?

沼口麻子

サメは一般的に怖いとしか認識されていません。世界中



10月7日の開講日に集まった塾生たちと講師

(撮影 宇津木聡史)

に500種類以上存在し、生態学的に非常に面白いものや、人と密接に関わる文化を持つものも多いです。サメに特化した情報発信を目指し、サメを通しての環境教育活動をするにはどうすればよいのかを学びに参りました。

(シャークジャーナリスト)

ライターを目指して

山内真由美

約7年務めた環境保全NGOを退職し、いまはフリーです。大学では文学部史学科歴史地理学を専攻。日本の中世村落共同体をテーマに、自然環境と人間の営みのバランスについて学びました。最近はダイバーシティに関心があります。NGOでの経験を生かし、ライターとして活動したい。

科学って楽しい

吉原香織

気象や航空の分野で働いてきました。科学って本当に、本当に難しい。だけどヒントは私たちの生活にあふれていて、だからこそ楽しい。そんなことをより多くの人に伝えたいと思って、私はジャーナリスト塾の門を叩いたのです。

(スカイマーク)

日本を知らせたい

安藤恵美子

日本が誇る優れた先端技術や価値を紹介し、日本をもっと知ってもらうこと、深刻な理数離れと国民全体の科学リテラシーの低下、減災・防災のための学際教育が関心事です。塾での学びや議論を通じ、自分らしい情報発信の方法についても考えていきたいです。

(東大大学院情報理工学系研究科)

伝え方をもっと学びたい

青山夕貴子

生態学の研究で博士課程を修了し、現在はNPO法人で鳥の調査などをしています。研究発表やニュースレターの編集など、自他の研究を人に伝える機会がありました。どうしたら分かりやすく、興味をもってもらえる伝え方ができるのか、その工夫を考えることにやりがいを感じ、受講しました。

伝える力を求めて

斎藤悠

大学教授よりも生きものに詳しい人が、市民の中にいます。その現場に学術世界の理論や最新の技術をいかに導入するかが大きな課題だと感じています。私は保全生物学を学んできましたが、伝えること全般について力をつけたい

と考えています。(あずさサステナビリティ社)

社会との接点幅広く

福田昌弘

大学でたんぱく質の「かたち」を調べる研究をしています。科学を専門にする方とよくお話しますが、それだけでは接する世界の幅が狭い。この塾で、科学は社会でどのようにとらえられているか、より多くの人に科学の魅力や可能性を伝えるにはどうすればよいのかを学びたい。

(東大大学院生物科学専攻)

市民と科学者を結ぶ

飯田貴也

科学が専門領域を超えて社会問題になっている時代に、私はジャーナリズムに社会と科学、ひいては市民と科学者を結ぶ役割を期待します。科学報道は「正しく伝えようとすればするほど、うまく伝わらない」ジレンマに陥りがちですが、皆様との議論を通じて、そういった問題と真摯に向き合っていきたい。

(大学生)

「知らない」という恐怖

船津雅志

人間の科学への恐怖は「知らない」ことだと思っています。私自身理解するのが困難な研究の関連業務をしてきました。その中で自ら理解したことを専門外の方に伝え、理解していただくには伝える側も相当な工夫が必要だと分かりました。私の知らない分野の方とも交流を深めていきたい。

定型文ではなく

田島直人

研究者として「誰に」「何を」「何のために」伝えているのかを自分で確かめたい。所属機関では遺伝子組換え農産物や農薬、食品添加物の安全性を社会に伝えています。研究組織と社会の間の科学コミュニケーションが、定型文のやり取りに終わっていないか？ 皆様とのディスカッションで振り返りたい。

(農業生物資源研究所)

食品情報を伝える

笹原由雅

加工食品メーカーの研究員です。研究内容や食にまつわる事柄を、一般の方に正しく分かりやすく伝えたいと考えようになりました。しかし、正しく伝えようとすればするほど分かりにくくなり、結果正しく伝わらない状況が起きてしまう。これを打開したい、そのためのスキルを得たいと入塾しました。

分野を超えて議論を

熊谷善弘

大学で薬学を学び、新薬の開発にあたっています。幅広く一般の方にも医薬・科学の情報を正確に分かりやすく発信するには、課題の捉え方や伝え方を学ぶ必要があると考えています。ジャーナリストから専門的な指導を受けながら、様々な分野の仲間と議論し、理系の頭をほぐせればと考えています。

(製薬会社)

科学を伝える技法を

濱口翔太郎

原発報道をきっかけに科学報道への興味と問題意識を持ちました。大学院で科学技術ジャーナリズムを学び、広報誌に記事を書くインターンシップを経験。理系のバックグ

ラウンドがなく、細かなニュアンスや専門用語をうまく理解できずに苦勞することが多いです。科学を伝える技法をさらに磨きたい。

(早大ジャーナリズムコース)

アウトリーチの方法

菅原秀明

研究プロジェクトのアウトリーチ活動の観点から、研究成果の紹介や普及の方法論を学びたい。

(国立遺伝学研究所)

伝える力を養いたい

山田康平

大学でマーケティングとバイオテクノロジーの関わりやカフェインの覚せい作用について学んでいます。科学技術について、より多く知り、知識として多くを蓄えたいと思います。将来は広報や編集の仕事に就きたいので、人に物事を伝える力を養いたいと思ったのが入塾理由の一つです。

(明治大学商学部学生)

科学を伝える仕事に

山本洋士

大学3年生。人々の生活をよりよくしてくれる科学が好きで、その科学を周りの人に伝える職業に興味があります。塾では知識が乏しく、苦勞はあると思いますが、少しでも科学について考えるきっかけになれば。

(上智大学文学部新聞学科)

安全性のギャップ埋めたい

櫻井護

健康食品の会社で、品質と情報の管理が仕事です。お客様のゼロリスク信仰と、科学的な安全性のギャップがなかなか埋まらない局面に多々遭遇します。簡潔かつ正確に、こちらの言い分も伝え、納得いただくためのヒントを得たい。崇高な志とは言えないが、科学を正しく伝える目的に変わりない。

(サントリーウエルネス)

ジャーナリストに学ぶ

高橋昭紀

進化古生物学・地質学・科学哲学の研究者として働いています。現在、早稲田大の招聘研究員をしながら、教育・総合科学学術院と理工学術院で非常勤講師として、専門分野を学生さん達に教えています。日本語論文を書くのとは大違いな「ジャーナリストとしての文章の書き方」を学んでいければ幸せです。

(早大理工学研究所)

聞く力と伝える力を

加賀俊哉

科学教育誌『Science Window』の編集に携わっています。科学はもちろん、何かを人に伝えることは本当に難しく、自分は素人だと自覚しています。記事の書き方や、科学の情報の伝え方の難しさの壁にぶつかっています。人の言葉を聞く力、伝える力を身につけられれば。

(科学技術振興機構)

探検活動を経て

滝川大貴

学生時代は探検部の活動に没頭。ベネズエラでの「巨大猿モノス」と呼ばれる未確認生物の探査活動のほか、2014年1月中旬～3月上旬には「密林伐採と消えた巨大猿」をテーマに遠征調査へ。来年度から新聞記者として働く予定で、環境や労働の問題に関心があります。

(法政大学)

JASTJの活動に大きな足跡を残した元日本経済新聞編集委員の浅井恒雄氏と元科学技術振興機構(JST) 理事長の北澤宏一氏が2014年9月に相次いで亡くなった。二人の生前の横顔や業績を知る会員に追悼記を寄稿してもらった。(関連記事を6ページに掲載)

■ 浅井恒雄さんを偲ぶ

JASTJ創生期に大きく貢献 科学技術を広く議論する場作り呼びかける

田村和子 (共同通信社社友)

JASTJの生みの親、科学記者の大先輩・浅井恒雄さんが逝去された。心からお悔やみ申し上げ、ご冥福をお祈り申し上げます。

私は1970年代から科学ニュースを取材したが、浅井さんのお仕事とは重なることが少なく、ご業績も詳しくは存じ上げない。追悼文を書くなどおこがましいが、JASTJの初代事務局長、その前に東京で開催された第一回科学ジャーナリスト世界会議の財務委員長を引き受けて、苦勞が多い裏方の仕事を黙々とこなされた浅井さんの、行動力や優しさに、心から感謝をささげたいと思う。

1992年の世界会議は、直前にバブル崩壊にあい、資金不足で開催が危ぶまれた。浅井さんは、実行委員が手分けして企業や団体を回って協賛金を得よう



元気だったころの浅井さん
(2013年5月に皇居で=提供 奥様の恵美子様)

と提案され、率先実行された。当時は企業から寄付を集めることに抵抗も強かった。2年後にJASTJが発足した時も、企業の協賛参加には異論が出た。

そのとき浅井さんは、取材に応じない産業界の大物社長によく会ったときに、科学記者はよく勉強していて話が通じる、これからはお互いにもっと論じ合おうと言われた経験を語られた。企業の主張にも耳を傾け、科学記者も率直に建設的な意見を出して、日本の科学技術や産業の在り方、将来の姿を真摯に討論する場を作りたいのだと熱心に主張された。JASTJ創生期の浅井さんの貢献に改めて敬意を表したい。合掌。(JASTJ会員)

東北の歴史的な寺とキリスト教で 思い出す優しい配慮

中村雅美 (元日本経済新聞社編集委員)

「中村君、毛越寺に行ったのならあらかじめ一声かけてくれれば良かったのに」――。今から10年ほど前の初夏に入るとき、JASTJでお会いしたときに浅井さんからこんな声をかけられた。その年の春、私は北上から花巻、水沢、平泉と岩手県を訪れたのであった。平泉で中尊寺金色堂を久しぶりに見て、毛越寺に行き有名な浄土庭園を見て回ったのだが、その話を浅井さんにしたところ冒頭の言葉が聞けたのであった。その裏には「毛越寺に行くことがあらかじめわかっていたら、何か便宜を図ってあげられたかもしれないのに残念」という、浅井さんの優しい思いがあったのだろう。うかつにも私は知らなかったのだが、浅井さんは毛越寺の縁に連なる方であった。

私が日経に入社したのは今から40年以上も前だが、そのとき浅井さんはすでに日経におられたようだ。浅井さんは産経新聞からうつられたのだが、そのとき私は大阪勤務だったので詳しいことは知らなかった。浅井さんは岩手県一関市のお寺さんの縁続きであった。

その浅井さんが2014年の9月に肺炎で亡くなられた。告別式は9月29日に行われたが、その場所は横浜の野毛山キリスト教会。私は大阪に転居して出席できなかったのだが、東北岩手県の旧家の生まれである浅井さんとキリスト教。この一見奇妙に見える取り合わせに興味を覚えたのは私だけだろうか。浅井さんのご冥福をお祈りして、合掌。

(JASTJ会員)

■ 北澤宏一さんを偲ぶ

高温超伝導ブームに火 「若者に夢を」が後半生の目標に

鳥井弘之（日本経済新聞社社友）

北澤宏一君と筆者は、大学1年生で同じクラスになって以来、50年以上にわたる友人であった。大学時代、彼は出身地である長野県の飯山に学生を呼ぶスキークラブを作り地域に貢献した。東大の助教授時代には、技術動向を検討する日経のアドバイザー会議の主要メンバーとして筆者らを助けてくれた。

彼の最初の際だった功績は、高温超伝導現象を実証し、超伝導ブームに火を付けたことだろう。その成果を示すグラフを1枚だけ持って、米国のベル研究所で講演したところ、OHP 1枚だけの講演は初めてといわれたそうだ。世界中が北澤君の成果に刺激され、結果として、新聞紙上には「超伝導の兆候を観測した」といった記事があふれ、今にも常温の超伝導が実現するかのような幻想が広がった。これに対し、観測された多くのデータが不完全な実験によることを解き明かしたのも彼であった。以来、超伝導に関する新聞記事は正常化した。これも大きな



2012年6月例会で民間事故調の報告内容について話す北澤さん
(撮影 高木毅生)

成果だと考える。

（独）科学技術振興機構（JST）の理事長時代を振り返ると、持ち前の行動力で民主党による仕分けの嵐を乗り切ったことや、早い時期からiPS細胞の成果に注目し、その研究を加速するために力を注いだことが特筆される。2013年9月に東京都市大学に移りこれからという時に亡くなった。「若者に夢を」が、彼が人生後半において常に心に留めていた「座右の銘」であった。（JASTJ会員）

JASTJ賞選考と民間事故調で見せた バランス感覚と判断力

柴田鉄治（元朝日新聞科学部長）

優れた科学ジャーナリストを顕彰する「科学ジャーナリスト賞」をつくろうと提案したとき、私が秘かに考えたことは、外部選考委員に誰がしてくれるかに成否がかかっている、ということだった。

その初代選考委員になってくださった北澤宏一さんは、無類のバランス感覚を発揮して第1回から第5回まで大活躍、科学ジャーナリスト賞を軌道に乗せてくれた恩人である。

北澤さんはもともと優れた科学者だった。超伝導の分野では、世界に名をとどろかせた日本のスター科学者の一人だったといっても過言ではない。80年代の後半、超伝導のニュースが連日のようにメディアに報じられた「超伝導フィーバー」の火付け役ともいえる人だったのである。

この騒ぎの渦中にいた人として、科学ジャーナリズムの重要性和同時にその欠陥も深く理解されたのではないか。そして、その後、独立行政法人・科学技術振興機構（JST）という日本の科学技術政策を統括する巨大組織の理事長として、無類のバランス感覚を身につけられたのだらうと思う。

3・11福島原発事故が起これば、北澤さんは4つの事故調査委員会のうち、前代未聞と言われた「民間事故調」の委員長を務め、原子力委員長が作成した「東日本壊滅」の「最悪のシナリオ」を明るみに出すなど、特異な存在感を示した。

なかでも、事故から3日目の未明に東電の社長から官邸に伝えられた「全員撤退の通告」に対して、政府や国会の事故調が「官邸の勘違い」と判定したのに対し、唯一、「勘違いではない」とした北澤さんの判断力に、私は深く敬意を表する。合掌。

（JASTJ理事）

脇が甘かった「吉田調書」報道

非常に残念なスクープだったと思う。5月20日付朝刊で朝日新聞が報じた、いわゆる「吉田調書」だ。政府の福島原子力発電所事故調査・検証委員会が福島第1原発の所長だった吉田昌郎氏（故人）から2011年に聴取した非公開の記録を入手し報道した。

事故対応の中心にいた人物の証言であり二度と話を聞くことができない。福島事故報道にかかわる者なら何としても入手したい資料だ。「抜かれた」とまず舌打ちし、これを契機に政府が全文を公表すべきだと思った。

ただ福島第2原発への所員の退避を「命令違反」と断じた記事の中心的なメッセージには違和感があった。記事で紹介された証言からなぜ断言できるのかわからなかった。何らかの裏付け取材があるに違いないと感じた。

しかし9月になって朝日新聞社が記事を取り消したところを見ると、そうではなかったらしい。調書の記述だけから「命令違反」の大見出しをたてたのであったら、あまりにも脇が甘い扱いだったと思う。なぜこんなことが起きたのか、知りたい。

650人あまりの所員が第2へ退避したのは、吉田氏の意図と違っていただのは間違いない。またこれまでわ

かっている限りでは、東電本店（ことによっては吉田氏もからんで）が第1からの撤退を検討していた可能性を完全には否定できていない。まだ追求し解明する必要のあるナゾが残るのだが、朝日新聞の報道はそこに十分に迫れぬまま、結果的に問題の焦点をずらせてしまった。

報道への批判に応じる同社の対応も、私にはおかしく見えた。ブログなどで報道を批判したノンフィクション作家の門田隆将氏や同氏の記事を掲載した複数の週刊誌に対し、朝日新聞は抗議書を送った。訂正や謝罪記事の掲載を求め、対応しない場合「法的措置」を検討するとしていたという。文章には文章、批判記事に対しては検証記事で対抗すべきだと思う。

真偽はわからないが、朝日新聞のスクープの背景には政治的な意図をもったリークがあり、8月になって開始された産経新聞などの反論の報道も異なる立場からの情報提供だったと指摘する声を耳にする。もしそうなら、調書が政治的な宣伝（あるいは逆宣伝）に利用されメディアも翻弄された可能性がある。それは国民にとっても報道機関にとっても、不幸な経緯だったと言わざるを得ない。報道合戦の背景も検証されるべきだろう。（JASTJ理事 滝順一）

WEB編集長から

JASTJでは、講師の許可が得られた場合、月例会を動画で収録し、インターネットで配信しています。地方におられる会員や、当日どうしても参加できない会員の方々にとって、月例会の状況を知ることができる効果的な機会です。ぜひ、より多くの会員にご覧いただきたいと思います。今回は、この動画をご覧いただくための方法と、いくつかの注意点をお知らせします。

■動画を閲覧する方法

インターネットでは、YouTubeやニコニコ動画、Ustreamなど、多くのサイトで動画配信が提供されています。JASTJでは、YouTubeを使って動画を配信しています。

会員の皆さんが動画をご覧いただくためには、一般に使われているブラウザが必要です。Internet ExplorerやSafari、Chromeなど、ふだんお使いのブラウザをご用意ください。スマートフォンやiPadなどのタブレット端末でもご覧いただけます。会員の皆さんが事前に行っておかなければならないことは、これだけです。

月例会が行われた後、おおむね1週間程度で会員宛てに事務局から、「動画を閲覧できる準備ができました」という内容のメールが届きます。メールが届いたら、

JASTJのホームページで「会員専用」のページにアクセスして、YouTubeのアドレスをご確認ください。

■閲覧するときの注意事項

JASTJホームページの「会員専用」のページにアクセスするためには、パスワードが必要です。このパスワードは、2014年3月4日に事務局から配信された電子メールに書かれています。わからない場合は、遠慮なくsystem@jastj.jpへお問い合わせください。

月例会の動画のアドレスは、Googleなどの検索サイトではヒットしません。月例会の動画配信は会員限定のサービスであり、アドレスは推測されにくい、意味のない文字列で構成されています。このアドレスを会員でない人に教えたり、Facebookなどで公開したりしないでください。

動画は2週間の公開期間を定めています。公開期間を過ぎると削除され、閲覧できなくなりますので、ご注意ください。

動画閲覧についてご質問がありましたら、ご遠慮なく担当までメール（system@jastj.jp）でご連絡ください。

（Web編集長 藤田貢崇）

JASTJ をサポートする 賛助会員・団体一覧

(50音順、2014年12月現在)



一般財団法人 新技術振興渡辺記念会



味の素株式会社



宝ホールディングス株式会社



鷗友学園女子中学高等学校



株式会社東芝



花王株式会社



日本電信電話株式会社



独立行政法人 科学技術振興機構



ノートルダム清心女子大学 情報理学研究所



カクタス・コミュニケーションズ株式会社



株式会社日立製作所



株式会社構造計画研究所



ロート製薬株式会社



サントリーホールディングス株式会社

賛助会員募集中

■ 新入会員の自己紹介

● 松本光樹（毎日新聞社甲府支局）

2013年から毎日新聞社で記者をしています。バックグラウンドは神経科学。科学技術がブラックボックス化しており、科学者と一般市民をつなぐ科学記者になりたいと思います。

● 笹川由紀（農業生物資源研究所）

ジャーナリスト塾の12期生です。研究所で科学コミュニケーターの仕事をしており、情報発信の立場にいます。科学研究のメディアや一般の方々への伝え方など学びたいと思います。

● 岩瀬なつみ（株式会社テクロス）

国内外での循環器領域の学術集会を取材し、WEBサイトや専門誌に最新情報を発信しています。多くの方に有益な情報を提供し、この領域の発展に貢献していきたいと思います。

退会

楠原昌樹、大澤直樹、藤田剛

■ お知らせ

「科学ジャーナリスト賞2015」の候補作と選考委員募集中

科学ジャーナリスト賞2015の候補作と1次選考に携わっていただく会員「バーチャル書評委員」を募集中です。科学を伝える取り組みの関心をお持ちの方にふるって参加をお願いいたします。

科学ジャーナリスト賞は、科学技術に関する報道や出版、映像などで優れた成果をあげた方を表彰します。原則として個人（グループの場合は代表者）を対象としジャーナリストだけではなく質の高い啓蒙書を著した科学者や科学技術コミュニケーターなども対象にします。2014年1月から2015年2月末までに公表された作品で、自薦・他薦を問いません。締め切りは2015年2月末まで（同日付けで推薦書必着）。科学技術ジャーナリスト会議のウェブサイトに募集要項や候補作推薦書があります。

選考は会員による1次選考と、白川英樹・筑波大名誉教授ら5人の有識者が中心の2次選考の2段階です。この1次選考に関わっていただくのが「バーチャル書評委員」で会員の皆様をお願いしています。書籍と新聞・

雑誌記事の候補作について委員の間で回し読みをし、2次選考に値するかどうかを評価します。展覧会も時間が許せば、足を運んで評価をいただければ幸いです。参加を希望の方は事務局へメール（hello@jastj.jp）をお送り下さい。

◎ ◎ ◎

今年は早くから募集を始め、すでに45件の書籍や映像、展示会などが推薦されています。これまでに候補に挙がっている作品は次の通り。

<書籍>「嘘と絶望の生命科学」(榎本英介 文芸春秋) / 「福島原発22キロ高野病院奮戦記」(井上能行 東京新聞) / 「ドキュメント豪雨災害」(稲泉連 岩波書店) / 「献身 遺伝病FAP患者と志多田正子たちのたたかい」(大久保真紀 高文研)

<映像> NHKスペシャル「神秘的球体マリモ〜北海道阿寒湖の奇跡」(日本放送協会)

<展示> 「科学雑誌〜科学を伝えるとりくみ」(東京理科大学近代科学資料館)

(担当理事 滝順一、事務局 中野薫)

会員の BOOKS

新刊紹介

日本の発明・くふう図鑑

発明図鑑編集委員会編著（岩崎書店・6000円＋税・2014年9月）

日本人は、この100年余にどんな発明・くふうをしたか。3年前に編集委員会を立ち上げ、素人目線を大切にして75件を厳選し、小学生の高学年から大人まで楽しめる本に仕上げた。カップめん、iPS細胞、金魚、電気炊飯器、イブシロンロケットなど多彩。1件を大判見開き2ページで紹介。きれいな写真、イラストで青少年の好奇心を刺激できれば幸い。6人の共著で、私が代表を務めた。（JASTJ理事 牧野賢治）



編集後記

▶浅井さんと北澤さんが亡くなられたのは、二人を良く知る私にとって残念でなりません。日経新聞に入社したばかりのとき、浅井さんには最初の取材に連れて行ってもらいました。北澤さんとは高温超伝導ブームのとき以来、大変お世話になりましたが、特に子どもたちの理科離れを心配した北澤さんや追悼記を書いた鳥井さんが夏休み学校を開いたとき、お手伝いをした記憶があります。二人の元気だったころの姿が、いまでも鮮明に蘇ります。合掌

編集・発行

 **日本科学技術ジャーナリスト会議**
Japanese Association of Science
& Technology Journalists (JASTJ)

〒112-0001 東京都文京区白山 5-1-3 東京富山会館 5F
電話・FAX: 03-5689-7191 Email: hello@jastj.jp
会 長／小出重幸、事務局長／引野 肇
編集長／高木勲生